

「お前のことになるとない」

その言葉に、胸が締めつけられた。

三日後、不正アクセスの痕跡が見つかり、紗季の潔白は証明された。

会社を出たあと、彼女は桐生を待っていた。

「蓮さん」

初めて名前を呼ぶ。

桐生が立ち止まった。

「……もう一回」

「嫌です」

「今、確かに呼んだ」

「勢いだから」

「もう一度だけ」

仕事ではあれほど隙のない男が、こんな顔をするとは思わなかった。

少し笑ってから、紗季は彼の目を見る。

「蓮さん」

今度は、はっきり呼んだ。

その表情が変わる。

紗季はもう逃げなかった。

「私も好きです」

「……それは」

「恋愛の意味です」

「分かってる。でも、確認させろ」

「好きです」

もう一度言う。

「蓮さんが好き」

次の瞬間、桐生は額へ手を当てた。

「待て」

「何ですか」

「今、かなり余裕がない」

「そんな顔には見えませんが」

「顔に出さない訓練を十年以上してる」

「何の訓練ですか」

「社会人の訓練だ」

少し笑ったあと、彼は真剣な目で紗季を見た。

「付き合ってほしい」

「はい」

「後悔させない」

大袈裟だと思った。

けれど、その夜初めて桐生の家へ行って、紗季はその言葉の意味を知ることになった。

桐生の部屋は、高層マンションの二十階にあった。

窓の向こうに広がる夜景は綺麗だったが、紗季にはほとんど目に入らなかった。

恋人になったその日に、好きな男の家へ来ている。

その意味を理解していないほど子どもではない。

「コーヒーでいいか」

いつもと変わらない声で尋ねられ、紗季は逆に緊張した。

「はい」

キッチンへ向かう背中を見る。

ジャケットを脱いだ白いシャツ越しに、広い肩から腰へ落ちるラインが分かる。

会社で何度も見てきたはずなのに、今夜はまるで違う。

自分だけがいる部屋。

二人きり。

恋人同士。

その言葉を意識した途端、喉が乾いた。

ソファへ並んで腰掛けたあとも、桐生は紗季に触れようとしなかった。

肩ひとつ分の距離を空け、普通にコーヒーを飲んでいる。

「……遠くないですか」

我慢できずに言うと、彼の視線がこちらへ向いた。

「近づいたら困るかと思って」

「恋人になったんですよね」

「ああ」

「だったら、もう少し近くても」

言い終わるより先に、桐生の手が伸びた。

指先が紗季の頬へ触れる。

一度、輪郭を確かめるように撫で、それから耳へ髪をかけた。

その動作だけで、呼吸が浅くなる。

「紗季」

名前を呼ぶ声が低い。

「キスしていい？」

頷くと、桐生がゆっくり顔を近づけた。

最初は触れるだけだった。

唇が重なり、数秒で離れる。

あまりにも丁寧すぎて、紗季は思わず彼を見る。

「……終わりですか」

その言葉に、桐生の瞳の奥が変わった。